

* 「あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。そのような勧めは、あなたがたを召してくださった方から出たものではありません。わすかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。」(ガラテヤ5:7~9) 割礼を受け、律法を守らなければ救われないと主張する人達がガラテヤの教会の中に強い影響力を持つようになった。しかし、そのような考えは神様から出たものではない、とパウロは言う。彼らは悪いパン種のように、あっという間に粉全体に広がってしまう。今の世界でも、エホバの証人やモルモン教などのように、聖書の間違った解釈の上に立っている新宗教が存在し、世界に勢力を伸ばしている。

* キリスト教異端の多くは、信じることを以外に救われるための条件を付けている。その条件も、組織のために働くこと、教祖にたいする忠誠や服従などである。これらの成績が悪いと救われないのである。私たちのような罪人や弱い者はだめなのである。聖書の中心的教えである十字架の贖いの教理は非常に薄い。

* ガラテヤの割礼派は、ユダヤ人が守ってきた割礼を異邦人も受けなければならぬと強要した。割礼は8歳になった男の子の性器の先端の皮を取り除く手術であるが、これはアブラハムが神とイスラエルとの契約のしるしとして神から行うようにと命令されたことから、イスラエルの民は大切に守ってきた。しかし、イエス・キリストの福音は、全世界の民族が平等に受けることができるものであり、割礼の習慣がない他民族も割礼を受けなければ救われぬというのは間違っている。割礼を守れということは、モーセの律法全部を守れということになり、それができないならば救われぬというのなら、誰一人として救われぬだろう。イエス・キリストの福音はまさに、律法を守れない人たちのためにあるのである。パウロもかつては律法主義者であったが、キリストに出会って十字架を信じる信仰によって生きている。「私たちは、信仰により、御霊によって、義をいただく望みを熱心に抱いているのです。キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けぬは大事なことでなく、愛によって働く信仰だけが大事なことです。」(ガラテヤ5:5~6)

* パウロは、ガラテヤの信徒たちを愛し、信じていた。間違った考えから純粋な福音に立ち帰ってほしい、という。私たちも、イエス・キリストを信じる信仰以外に余りにも心が奪われていないだろうか。クリスチャンだからあしななければならない、こうしては駄目だという「律法主義」に陥っていないだろうか。イエス・キリストに帰ろう。